

『建武年中行事』雑考（二）

佐藤厚子

元日の節会——その二

○中世の節会

元日節会は、元来、雑令に定められた節日の規定に基づく儀式である。天皇は、律令国家の長としてこれを主催する。元日節会についてこうした定義付けは、後世に至っても、『西宮記』以下の儀式書の記述の中に、確実に生き続けた。その象徴ともいえるのが、節会の執り行なわれる間、南殿の御帳の内、天皇の座右に置かれるという「式の筥」である。

儀式書にとって「式の筥」とは、令制儀式としての節会が古代そのままにあるということを、保証する役割を担っていたのではない。か。「式の筥」が語るのは、こういうことだ。ここに展開する節会の姿は、『内裏式』の次第を規範としたものであり、それは、九世紀始めの令制儀式を今に再現するものである、と。撰者の意図の如何をいうのではない。むしろ、撰者たちは、しばしば「近例」を示すことで、次第の細部に昔とは違いのあることを断わっている。だが、儀式書における「式の筥」の存在は、撰者の目論見を超えたところ

で、自ずから、特別な意味を帯びる。後世の儀式書は、「式の筥」によって、節会の本来の出自を確認し、律令国家の儀式という建前を維持し続けたのである。

しかしながら、その事實は、必ずしも節会の性格の不变をいうものではなく、節会についての叙述が「式の筥」なしでは成り立たなかった、ということを示すのみである。儀式の性格が古代のそれから変化しつつある時、或いは、全く異質なものと変化を遂げた後にこそ、「式の筥」による出自の保証が必要とされたのではなからうか。

元日節会は、十世紀前後を境として、内実を大きく転換させてゆく。前項では、そうした変化の表れのひととして、「諸司の奏」が徐々に簡略化し節会の中核から排除されることを挙げた。曆奏・氷様奏・腹赤奏の簡略化は、豊葦原中国の支配者たる太陽神の子孫という古代的な天皇の像が、国家儀式の中で、もはや意味をもたぬものとなっていることの表れである。しかし、古代の意味を失っても、次第としての「諸司の奏」そのものはなくなるならない。『建武年中行事』は、「諸司の奏」を内弁作法の一環として記し留めることで、形骸化した次第に新たな意味を付与していた。¹⁾『建武年中行事』にとつ

て、節会の次第とは、さまざまな作法の連なりである。作法の連鎖として記された次第の中に、古代とは異なる国家儀式の姿が、自ずと浮かび上がってくる。ここでは、前項に続いて『建武年中行事』の節会次第を辿りつつ、こうした叙述の背後に何があるのか、さらに手探りの作業を重ねてみようと思う。

天皇が南殿の御帳に着座すると、まず、内弁による「謝座」の儀がある。

内弁、軒廊よりいでて（二位は一間、二位は二間）、砌に進みてねりはじむ。左近の陣の南のほとりに進みたつ。内弁す、み、近衛の陣たつ。内弁に家礼けらいの人は退く。西むきにて一揖、いぬむきにて謝座（二拝なり）、又一揖して帰り入る（或は西向にて二拝一揖、或は皆揖も拝もいぬむき、或は揖を略する事もあるなり。始を略し、後を略す。説々なり。……）

*「近衛の陣たつ」＝『群書類従』本「近衛の陣にたつ」。
『新訂建武年中行事註解』に拠り改める。以下同。

陣の座での諸事弁備を了えた内弁は、近衛の警蹕を合図に宜陽殿の元子に着き、内侍から昇殿の勅許を受ける。勅許に応じて、内弁の行なうのが、「謝座」の礼である。内弁は、東の軒廊を出て南殿の砌から斜めに練歩し、庭上の左近衛の陣の南のあたりまで進んで再拝する。この間、近衛は起立し、さらに内弁に対して家礼をとる者は、定位置を退くという仕種で以て敬意を表すという。

内弁作法のうちでも特に謝座の作法は重要なものとされ、家々によって細部にわたる流儀が伝えられていた。『江家次第』『内弁細記』は、元日の項の大半を謝座に関する記述に当てており、その中には、源師房が「内弁能以「謝座」為「事」、自余事非「事数」と説いたというエピソードさえ紹介されている。内弁の仕事は、謝座を立派に

こなすことに尽きるというのである。実際、内弁の謝座が、肉体的精神的にかなりの労力を要するものであったらしいということは、練歩の所作一つを取ってみても、容易に推察できる。だが、師房の言の意味するところは、そのレベルに止まるものではない。

「謝座」は、内弁を務める者にとつて、元日節会の次第のうちでも最も晴れがましい場面といえる。内弁の謝座は、単に天皇との同殿を許されることに対する礼というだけのものではなく、この点で臣下一般の謝座とは性格を異にする。宴の開始にあたり、主催者たる天皇は、その意を代行すべき者として特に一の大臣を指し、近侍を命ずるのである。それ故に内弁は、特に群臣に先立つて昇殿するので。この後、内裏の門を開き、群臣を召し入れ、宴を賜うといった次第は、全て、天皇の意を体する内弁がこれを「仰す」という形で執行される。「謝座」の所作に、天皇の意志の代行という任務を拝した内弁の榮譽そのものを表すという、格別の意味が認められたとしても不思議はない。

重要なのは、その栄えある内弁という役目が、家職や家格と直接に結びつくものであったという点である。内弁を務め得るのは原則として一人の人であり、一人の人を出す家は、既に特定の層に固定している。とすれば、「謝座」の内弁は、家職の重みや家格の誇りといったものを一身に背負って、これに臨むこととなる。出自正しき一人の人として、洗練された家伝の作法を晴れの場で過つことなく披露すること。それこそが、内弁を務める者の全精力を傾けて取り組むべき、最も肝要な仕事である。師房のいう、内弁にとつての謝座の重要性とは、そこまでの意味を含むはずである。

儀式作法の細緻化は、家格に結びついた「職」の体系の形成と一体のものであり、相互に切り離して考えることはできない。『建武

年中行事』が成ったのは、『江家次第』からさらに二世紀の時を経て、家格序列と「職」の体系とがほぼ確立した時代のことである。先に挙げた本文にも、再拜と前後の揖を為す際の方角や、揖を略すか否か等について種々の説ある旨、注されているが、練歩に関する記述はさらに詳細である。

「……ねりとゝまる時は、右の足をこまかに、左の足をのべて、練りめぐるなり。すべて太刀のさき、下襲のしり、冠の先はたらかず、またとゝこほらずして、むらなくす、むをよしとす。故実でもあるなり」。桜の木をすぐる程にねりとゝまる（ねる時、ねらざる時、けぢめさだかならぬものなり）。

ここに記された「説々」「故実ども」の一つ一つには、「職」の体系を支える家々の意志が込められていたはずなのだ。やや時代は降るが、『作法故実』『練歩事』には、「自レ始至レ終。於二中間一以レ不レ停為レ善。同拍子也。其身体不レ動不レ傾。腰不レ動。剣尻不レ動。」などと、『建武年中行事』の記事に通ずる内容も見える。『作法故実』のこの項は、『江家次第』『内弁細記』などを引用しつつ、「口伝」として家の流儀を説くという体裁をとっており、ここに挙げた文は、後者から拾ったもの。著者は、後醍醐の家格を無視した人事を『後愚昧記』において痛烈に批判した三条公忠の子、実冬とされる。後醍醐天皇は、「故実ども」を書き留めながら、伝統の名のもとに結実した家々の意志を、一体どのように受けとめていたのだろう。しかしながら、後醍醐の儀式書編纂の意図についてこれ以上に立ち入ることは、本項の趣旨を超えている。さしあたっては、『建武年中行事』のこうした叙述が、中世貴族社会のありようと密接に関わるものであったということを、確認するに止める。

ところで、叙述の当代的性格をいう場合、この場面に「家礼」と

いうことがいわれているのも、見過ごすことはできない。「家礼」という語は、一条兼良の『花鳥余情』が、『源氏物語』藤裏葉巻に見える「家礼」の語に注して、「家礼といふは、子の父をうやまふ事也。他人なれとも子に准して礼をいたすをは、今の世にも家礼といひきたれり」と説くように、子が父を敬い礼することを原義とし、転じて他家の者が同様の礼をとることをもいうようになったとされる。但し、十二世紀前後の日記などでは、父子礼、兄弟礼、姉妹の夫に対する礼、氏長者に対する礼、家司等の主に対する礼などを、幅広く「家礼」と称している。これからすれば、「家礼」とは、子の父に対する礼と限らず、近親や同族尊上に対する礼を基本とし、他家の者がこれに準じた礼をとることをも含めていうようになったものと考えられる。つまり、「家礼」の成り立ちは、親子・近親の関係を基として、これを擬制的に拡大したところにあるといえよう。

さらに、他家の者が家礼をとるという場合、下位の家格の者が摂家等に家司として仕えることなどを契機に一種の主従関係を結ぶものと、上流の家格の者がそれぞれの独立性を保ったままで交流するものがある。本文に、内弁に対して家礼をとる人というの、近衛の中少将であれば、大臣の家に奉仕し庇護を受けるのではなく、同等かそれに近い家格の子弟で親しく交わる者のことであろう。この場合は、当人や近親の姻戚関係などを根拠とするので、一代限りにおわることも多い。しかし、前者の場合、特に摂家の家司を出すような層については、家礼の累代に及ぶ可能性が高くなり、これが、中世から近世にかけて、摂家に属する門流として固定してゆくことになる。そこでは、擬制的な親子・近親の關係が、家と家との關係にまで及ぶのである。

古代国家は、天皇と臣下という関係を唯一絶対的なものとし、臣

下相互の結びつきについては、これを国家の体制の枠外にあるものと見做して公的な場から排除した。国家の内に、天皇の存在抜きに完結するような、自律性をもつ共同体が生まれることを忌避したのである。『養老令』儀制令は、「凡元日。不_レ得_レ拜_二親王以下_一。」として、元日に臣下に対して拝礼を行なうことを禁じている。即ち、古代国家の論理からすれば、臣下の間で完結的に成り立つ「家礼」などというものが、元日の国家儀式の次第に記されることは、まずあり得ない⁽⁴⁾。しかし、十世紀の段階で既に、こうした古代の論理は効力を失っていた。天皇の超越性を確認すべき元日の朝拝の儀は廃れ、これに代わるものとしては、近臣が清凉殿に向向いて天皇を拝する小朝拝が行なわれた。小朝拝は、天皇の家と臣下の家との「私礼」秩序に基づく儀礼であるとされる。この頃には、天皇と臣下との関係自体が、家のレベルで把握できるものとなっていたのである。

中世の節会は、令制儀式の建前を崩していなかった。その点、当時においても私的行事と認識されていたらしい小朝拝とは、事情を異にする。だが、先の儀制令には、「唯親戚及家令以下。不_レ在_二禁限_一。」という例外規定があり、内外諸親や同姓氏族、及び有品親王と職事三位以上の家の職員が、尊上に対して拝賀を行なうことを認めていた。律令体制の中で例外的に認められた個々の家内の関係を、家と家との関係にまで擬制的に拡大してゆけば、天皇と臣下の絶対的關係も、実質的には骨抜きとなるのである。この時代、節会の作法書に家礼の項目が立てられるのは珍しいことではなく、中世の国家儀式は家礼の作法をも含んで成り立っていたというのが、実態であつたろう。何よりも、天皇親撰の儀式書の節会次第に「家礼」が記されるという事実は、当時の国家儀礼が、家と家との関係を見失って存在し得なかったということを示している。

家職、家格序列、家礼による家相互の結びつき。これらはいずれも、中世貴族社会の構成に欠くことのできぬ要素であつたと考えられる。中世の貴族社会とは、基本的に、家々の共同体といえるものであったのではないか。家々は互いに関係を結びながらも、関係の媒体となる家職や家格や家礼に対して、根拠を与えうる「公」を必要とした。そうした性格を中世の「公」がもつとすれば、国家儀礼の意義も、さまざまな作法を通して、家々が相互の関係を確認するということに あつたのではなからうか。

ところで、『建武年中行事』の節会次第のうちには、令制儀式の面影を窺い得るような部分もないわけではない。「群臣参入」「謝座」「謝酒」と続く一連の場面がそれである。ここでは、典型的な例として、「群臣参入」の次第を採り上げる。

座の上の方にかへりみて、開門つかまつれと仰す。左右近の将曹門にむかひて、門をひらく。扉を叩くなり。開門つかまつりぬるよし、陣官、軒廊のはしの辺にてこれを申す。内弁、また仰いはく、るし座にまかりよれ。陣官、またこれをつたへて、閤司を門下にすすむ。帰り参りて閤司、座につきたるよし申す。内弁、舍人を召す二声「笏を近うあて、息をちらさず」。大舍人いらへて、少納言に告げしめす。少納言門よりいりて、はしりてへんにつく「走る事、五位は五尺、四位は三尺ばかり」。内弁宣、まちきんだちめせ、少納言いせうしてかへり出づ。

*「仰いはく」Ⅱ『群書類従』本「仰三」

謝座を了えた内弁は、南殿に設けられた大臣の元子に着いて、この次第を指揮する。内弁は、まず近衛の将曹に承明門の開門を命じ、閤司を門の左右の脇に着座させ、次に遙か門外に控える舍人を介して少納言を召し、少納言が庭上の版位に着いたところで臣下の参入

を命ずる。

「群臣参入」の次第は、やはり『建武年中行事』の一般的な叙述の仕方に従って、これに携わる者の作法の一環として記されている。引用本文に即していえば、開門・群臣参入を指揮する内弁の所作が記されているのである。だが実際には、内弁の所作としては、近衛や閼司や少納言にどのような指示を与えるのが順次記されるのみで、その他にはわずかに、舍人を召すに際して門外までよく通る声を出すために工夫された、特殊な作法のあることが注記されるに止まる。ここでの内弁の仕事は、「開門つかまつれ」「ぬし座にまかりよれ」「まちさんだちめせ」という定まった台詞を、間違ひなく発することのみであり、指示を受けた近衛や閼司や少納言等、中・下級の官人たちは、令の職務規定通りの仕事を忠実にこなしてゆく。結果的にその記述は、律令官制の実際に働く様を再現してみせる体ものになっている。

同様のことは、外弁の王卿の所作についてもいえる。

外弁の公卿、門の左の戸びらより入りて、次第にへうにつく。

第一の人ねるなり。異位重行〔大臣のうしろに大納言、其うしろに三位の中納言、其うしろに四位の宰相、二位中納言は大納言の末にをめり。三位の宰相は、中納言の末にをめるなり〕。

参入の命を受けた外弁の王卿は、承明門の左扉から参入し、庭上に予め立てられた標の位置まで進み、位階に従って列立する。

この場面では、個々の王卿の具体的な動作についての記述は殆ど見られない。可能性としては、外弁の上卿に相應の作法が伝えられていてもよいはずのところだが、わずかに、参入時の練歩について触れられるに過ぎない。また、藤原定能の『四節八座抄』や前出の『作法故実』は、列立の際の揖について念入りに述べているけれど

も、『建武年中行事』は、そうしたことには一切触れていない。ここでの王卿は、それぞれの帯びる官職の違いを超え、一律に、天皇に対する臣下としてあるといえる。さらに、臣下の列立は、位階序列という令制の論理を浮上させる。

とはいえ、この場面に、王卿の作法についての記述がないというのではない。当然のことながら、「外弁の王卿」の作法には、個々人の所作に関するものとは別に「群臣」としての作法があり、『建武年中行事』は主に後者を採ったのである。列立の際の「異位重行」は、「内裏式」以来の規定であるが、それ自体を儀式作法の一とする見方は、早くから存在したようである。『江家次第』には、「異位重行体有三説」とあり、また、参議の位置について、近例は中納言の後とするけれど正しくは中納言の末にやや退いて立つのだ、という注記もある。実際には、官位相当になっていない者のある場合、官位のいづれを優先するか、あるいは同官のうちでも上位の者と下位の者との間にはどの程度の距離を設けるか、などといった類のことも、問題となったのではないかと推測される。

肥大化した内弁作法が表面化せず、外弁の作法についても「群臣」としてのそれが優先された結果、『建武年中行事』の記す「群臣参入」は、いかにも令制儀式に相應しい印象を与えるものとなった。そうした事情は、「群臣謝座」「謝酒」の場面も同様である。その次第は、内弁が「しきゐん」という定型の台詞を以て堂上着座を命ずると群臣はこれに応えて再拝、次に、造酒正が外弁の貫首の人に空盞を授け、群臣再拝、というものであるが、内弁の所作が定まった台詞を発することに限定されるために、相対的に中・下級官人の動きが前景化し、外弁についても、個々の王卿の動きに触れぬことが、天皇に対する臣下としての在り方を強調することになっている。その叙

述の仕方は、およそ『西宮記』以来の私撰儀式書を踏襲するもので、『内裏式』に比較しても、大きな隔たりは感じられない。

しかし、『建武年中行事』においては、このような場面はむしろ例外的なのであって、例えば、「謝座・謝酒」に続いては、臣下の昇殿作法が次のように詳述されている。

外弁の人々、次第にす、みて堂上にのぼる〔南のらん〕にそひて、左の足を先にす。くだる時は、北の欄にそひて、右の足を先にす。はしの足をうやまふ心歟。但いづれも南を用ふる人もあり。

*「はしの足」Ⅱ『群書類従』本「はしの中」

臣下は、軒廊から南殿の東階を経て殿上の座に着くのであるが、その際の作法については、『西宮記』にも、「南座入^レ自^二母屋東一間^一。北座入^レ自^二東庇同母屋中間北辺^一。」などという注記があり、かなり以前から形が整えられていたようである。『建武年中行事』のいう階の昇降の仕方に関しては、『四節八座抄』「参上着座事」に、同様の記載がある。つい今しがた、天皇の臣下として南庭に列立し、天皇に再拝して晴れの日の恩寵を謝したばかりの王卿が、昇殿の条ではたちまち、典雅に練り上げられた身のこなしを披露すべき一人一人の王卿になるのだという。その姿は、もはや群臣一同のものではない。『建武年中行事』の節会次第に、律令国家の論理を垣間見ることがあるとしても、これを、記述の一貫した姿勢によってもたらされたものと受けとめるのは、誤りであろう。

ここで注目したいのは、節会次第の其処此処に見える定型化した台詞についてである。これらは元来、節会の重要な場面で発せらるべきことばの、その重要性故に固定したものであろうが、儀式作法の体系化とともに、むしろ、由緒ある古い詞であること自体に価値をおかれるようになっていったのではないかと思う。そして、作法

の一環に組み込まれた台詞は、次第のあり方にも一定の影響を及ぼした。中世の節会次第は、『内裏式』等に定められた次第を規範としながら、運用上の操作によって徐々に内実を変化させていったものであるが、そこに、定型化した詞は、変化した実態を覆い隠し、次第の古式を保証する役割を果たした。また、それとは逆に、ひたすら作法を遂行するためだけに存在する次第というものを産み出すことで、変化を露呈する働きもしたのである。

まず、先に引いた「群臣参入」の条の、「まちきんだちめせ」という詞を例にとつて考えてみる。これは、宴を賜うべき臣下を内裏に召し入れよという、天皇の意向を伝える詞で、いわば、当次第の意味を集約する重要な台詞である。およそ、内弁の指示は、多くは詞を伴わず、単に促す仕種を以てこれに代えるのだが、古くから固定した台詞のある場合に限っては別であり、しかも、そういった場面では、当の台詞を発することが、内弁の仕事のほぼ全てとなる。「群臣参入」における内弁は、『内裏式』以来の由緒ある詞を、過つことなく発声することだけに意を注げばよい。

元日節会に参加を許される臣下の範囲は、古代から中世にかけて大きく変化した。例えば、『内裏式』の編まれた当時には次侍従以上であったものが、『江家次第』になると「近例侍従不^レ見」とある。実質的に諸大夫層が排除され、親王及び参議以上の公卿に限られるようになるのである。しかし、有資格者の範囲が徐々に狭められても、その者たちを一貫して「まちきんだち」と称することには、特に不都合はなかった。「まちきんだち」とは、即ち、天皇の御前に伺候し政務に与る「まへつきみたち」の謂いであるから、節会においてそのように称せらるべき臣下の範囲が、時の要請に応じて再編成されていったとしても、そのために詞の意味までが失効するとい

うことはなかったのである。

こうして、定型化した台詞は、内実の変化には関わりなく、次第の軸となる詞として生き続ける。さらに、台詞を発すること自体が作法の体系に組み込まれてしまえば、内実の変化に応じて詞の原義を離れた用法も現われ、また、専ら作法を遂行する必要から、古式のままだに遺された次第というもののさえ出来する。その例となるのが、酒饌の宴も半ばを過ぎた辺りに執り行なわれる「御酒勅使」の儀である。

【別表】酒饌の宴、次第構成の比較

儀の饌	酒蓋の儀	奏楽
<p>●天皇に饌を供す</p> <p>群臣に饌を賜う</p>	<p>●昇殿の者に盞を賜う</p> <p>相続いて、昇殿せざる者に盞を賜う</p>	<p>○吉野国栖、歌笛を奏し贄を献す</p> <p>大歌所、大歌を奏す</p> <p>治部・雅楽、立歌を奏す</p>
<p>●天皇に膳を供す</p> <p>臣下に膳を賜う</p> <p>天皇に飯を供す</p>	<p>●天皇に飯・汁を賜う</p> <p>臣下に三節御酒を供す</p> <p>●二献</p> <p>○国栖奏</p> <p>御酒勅使</p> <p>〔三献。近代、一・二献〕</p> <p>○治部・雅楽、立楽を奏す</p>	
<p>●天皇に八盤を供す</p> <p>天皇に次々の膳を供す</p> <p>臣下に餽飧を賜う</p> <p>天皇に羹を供す</p> <p>天皇に飯を供す</p> <p>天皇に進物所御菜を供す</p> <p>天皇に御厨子所御菜二盤を供す</p> <p>臣下に飯・汁を賜う</p> <p>●天皇に三節御酒を供す</p> <p>天皇に一献を供す</p> <p>臣下に一献を賜う</p> <p>○国栖、歌笛を奏す</p> <p>●二献</p> <p>御酒勅使を仰す</p> <p>●三献</p> <p>○立楽</p>		
<p>●天皇に暗の御膳を供す</p> <p>天皇に脇の御膳を供す</p> <p>臣下に餽飧を賜う</p> <p>天皇に羹を供す</p> <p>天皇に進物所・御厨所を供す</p> <p>臣下に飯・汁を賜う</p> <p>●天皇に三節御酒を供す</p> <p>天皇に一献を供す</p> <p>臣下に一献を賜う</p> <p>○吉野の国栖、歌笛を奏す</p> <p>●二献</p> <p>御酒勅使を仰す</p> <p>●三献</p> <p>○立楽</p>		

「御酒勅使」について述べるには、この儀の成り立ちから説明する必要があるが、そのためには、まず、酒饌の宴の次第の全体的構成を示しておくのが便宜である。『内裏式』に規定する宴の次第は、天皇に饌を供す——群臣に饌を賜う（ここまでを、以下の論述では仮に「饌の儀」と称する）——昇殿の者に盞を賜い、昇殿せざる者に盞を賜う（同じく「酒蓋の儀」とする）——国栖奏——大歌を奏す——立歌を奏す（同じく、一括して「奏楽」とする）、となっている。『西宮記』『北山抄』『江家次第』でも、各項目の内容が細分

化されてゆく傾向は認められるものの、基本的には同様の構成となっていて、『内裏式』から大きく変化はしていない。また、『建武年中行事』の宴の次第は、およそのところ、細分化の著しい『江家次第』のそれを踏襲した形となっている。(別表)『内裏式』の規定では、奏樂が、酒盞の儀の後に行なわれたものか、それとも、酒盞の儀と重ねるようにして、ある程度まで同時進行的に実施されたのか、その辺りが明確ではないが、『西宮記』以下の奏樂は、酒盞の儀の細分化に応じて、一献——国栖奏、三献——立樂などというように、それぞれ組み合わされていることからすれば、あるいは、『内裏式』の記述も、酒宴進行中の奏樂実施を指示するものと読めるのかもしれない。要するに、節会の中核をなす酒饌の宴の次第は、饌の儀・酒盞の儀・奏樂から成り、その基本構成は、『内裏式』から後世の儀式書に至るまで、ほぼ一貫していると理解してよいのである。

問題となるのは、『西宮記』以降の儀式書が、酒盞の儀の間に、「御酒勅使」という『内裏式』の規定にはなかった次第を立てていることである。「御酒勅使」とは、殿上の王卿が幾度かの盞を賜わった後、別に改めて、承明門内東西脇の幄に着いた諸王・諸臣に対し盞を賜う儀。その概略は、内弁が天皇に賜杯の許可を乞う。詞は「まちなだちにみきたまはん」——内弁は参議を召し、賜杯の命を下す。詞は「まちなだちにみきたまへ」——参議は大夫のうちから勅使四人を選び、これを南階の下に召して命を下す。詞は「まちなだちにみきたまへ」——勅使は大夫の幄に向かう、というものである。まずは、ここでの「まちなだち」が、諸王・諸大夫のみを指すものとして用いられていることに、留意しておこう。実は、節会において、「まちなだち」という語が定型の詞の中に用いられる場

面は、三度ある。最初は、「群臣参入」。内弁の唱える「まちなだちめせ」という詞については、先にも述べた。二度目が、この「御酒勅使」の場面。最後は、酒饌の宴の後の「宣命」の次第で、内弁が宣命大夫の役を務める参議を召す際に、「まちなだちにみきたまへ」というのである。内弁が宣命使を召す詞は、御酒勅使を召す詞と全く同じであるが、「まちなだち」の指示するところは、明らかに異なる。「御酒勅使」は、特に諸王・諸臣の幄に盞を賜う儀であるから、御酒勅使を召す際の「まちなだち」は、臣下のうちでも諸大夫層のみを指す。一方、「宣命」は、天皇が臣下に向けて節会主催の意を改めて示すという儀であるから、宣命使を召す際の「まちなだち」は、この日、天皇から宴を賜わるといふ恩寵を得た臣下の全てを指している。即ち、「まちなだち」の語は、「群臣参入」「宣命」では全ての節会参加者を指し、「御酒勅使」の場面では諸大夫層を限定的に指し示すというように、事実上、二つの意味を混在させたまま使い分けられているのである。この使い分けは、『西宮記』以後の、いずれの儀式書にも共通する。「御酒勅使」の次第が立てられた背景には、どのような事情があったのだろうか。また、「まちなだち」が新旧の意味を併せもつようになったのは、何故なのだろうか。

この儀について、『西宮記』は、「二献、御酒勅使」とした上で、さらに「三献仰之。而近代、或一二献仰云々」と注している。つまり、元来は殿上の臣下に三献がわたったところで勅使に命を下すものだけれども、近頃は一献か二献のところでこれを行なうというのである。これによれば、「御酒勅使」という、昇殿を許されていない臣下に御酒を賜うための特別な儀は、『西宮記』編纂以前からあったもので、しかも、当初は、殿上の臣下に対する賜杯がほぼ終

わりに近づく頃、ようやく行なわれるものであったということになる。

しかし、『内裏式』の酒盞の儀、及びそれに続く次第を見ると、「行酒者把^レ盞、賜^二升^レ殿者^一、相統賜^二不^レ升^レ殿者^一」「觴行一周、吉野国栖於^二儀鸞門外^一、奏^二歌笛^一、献^二御贄^一」とあって、昇殿を許された者と許されぬ者との間に、それ程の待遇の差が設けられていたようには読めない。勿論、『内裏式』でも、昇殿の者の席は豊樂殿に、昇殿せざる者の席は頭陽・承歓両堂に設けることとなっていて、後者が前者の占める空間から完全に閉め出されていることは、『西宮記』以後と変わりはしない。待遇の差が小さいといっても、それは、あくまでも相対的な観点を以てしてのことである。また、この次第を見ただけで、『内裏式』の成った当時、殿上の臣への賜杯と昇殿せぬ臣への賜杯とを区別するための儀が全くなかったとか、両者に対する賜杯は殆ど同時に行なわれたとかいうような、即断を下すことも避けねばならない。『内裏式』では特筆されなかったものが、『西宮記』以後、次第の細分化に伴って表に現われたという可能性もあるからである。だが少なくとも、『内裏式』の次第は、昇殿の者への盞、昇殿せざる者への盞ともに、「觴行一周」を同じくすることを前提としている。それぞれに盞を賜う時機が、大きく懸け離れていたとは考え難いのである。

『内裏式』に「まちきんだち」を伴う大臣の詞が明文化されているのは、「群臣参入」の次第のみである。しかし、あくまでも推測ではあるが、『内裏式』に明文化はされずとも、その編纂された當時から、酒饌の宴の中で、「まちきんだちにみきたまはん」「まちきんだちにみきたまへ」という詞が発せらるべき場面は、存在したのではないかと思う。但し、それは、昇殿の臣と昇殿の許しない臣

との間に区別を設けるための儀ではなく、本来の意味での「まちきんだち」、即ち参会した臣下の全てに対して、盞を賜わんとする場面で発せられた詞であつたろう。『西宮記』以下の「宣命」における使われ方を見ても、「まちきんだちにみきたまへ」は、参会の臣下に盃を賜おうという天皇の意を表すための、いわば象徴的な詞であつたことが窺われる。『内裏式』の次第のうちに、この詞に相應しい箇所を探るとすれば、饌の儀が終わり、酒盞の儀に移ろうとする部分の他はあるまい。それが、『西宮記』以前のある時期までに、定型の詞はそのままに、諸王・諸臣に御酒を賜うための特別な次第として独立し、しかも、殿上の臣下への賜杯が既に一段落した辺りで、執り行なわれるようになった。同時に、従来とは異なる場面で唱えられることとなった「まちきんだち」の語も、新儀の内容に見合った新しい意味をもたざるを得なくなった、ということではなからうか。

実際、昇殿を許される臣下と許されぬ臣下との待遇の格差は、『西宮記』以後、決定的なまでに拡大してゆく。先にも述べた通り、節会参加の資格をもつ臣下の範囲は徐々に狭められ、その結果、中世の元日節会は、親王・公卿のみが参加し得るものとなっていた。『西宮記』では、諸大夫層の参会までも否定するような事態には至っていない。しかし、『江家次第』になると、「侍従以下着^二幄座^一」に「近例侍従不^レ見」とし、頭書にも「近代無^二諸大夫幄^一也」とあって、この頃までに、実践の場では諸大夫層の排除が完了していたことを明記している。『江家次第』の記事は、元日節会の場合から諸王・諸大夫の姿が消えたことを、最も早い時期に明らかにしたものである。だが、諸大夫層排除に向けてこれを差別化しようとする動きは、それより遙か以前、『内裏式』編纂の時に程遠からぬ頃から、既に、着々

と進行していたのではないだろうか。⁽⁹⁾

『建武年中行事』の書かれた時代、「御酒勅使」は、諸王・諸大夫に御酒を賜う儀として、定着して久しかった。定型の詞を含む内弁と参議の諸作法も、『西宮記』以来、整えられてきていた。しかし、『江家次第』『仰二御酒勅使二』の頭書に「近代雖レ不レ候猶存二古風二」とある通り、この儀が対象とするはずの諸王・諸大夫は、もはや節会の場にはおらず、夙に「古風」となった作法が遺るばかりだったのである。

次に二献、一献の如く、をはりて、内弁、座をたちて聲屈^{けいこく}して奏して云、まちきんだちにみき給はん。天許をはりて、参議一人をめしてこれを仰す。奉る人、座をたちて称唯して、末より内弁のうしろにけいくつしてたつ。内弁仰せて云ふ、まうちきんだちに御酒たまへ。参議、うけたまはりて、軒廊にくだりて、けう名をとりて、かへりのぼる。南のすのこ、第二の間の西のはしの辺にてこれを仰す。一揖して、あさく深く再びかへりみるていなり。座にかへりつく。

記述内容の骨子は、『西宮記』と比較しても大きな異同はなく、定型の詞も、勿論そのままである。前代の儀式書に見られぬ記事といえ、引用文の後半、内弁の詞を承けて勅使に命を下す参議の作法くらいである。その作法とは、以下の通り。参議は、軒廊に降り、勅使の名を記した交名を外記から受け取って殿上に戻る。南の簀子の東第二間の西端の辺で勅使を召し、諸王・諸大夫への賜杯を命ずる。次の「一揖して、あさく深く再びかへりみるていなり」というのは、承門門東西脇の幄に向かつて、勅使を召す仕種をするのである。参議は南殿の東端に近いところにいるから、西の幄は浅く顧み、東の幄は深く顧みることになるのだというのが、『江次第鈔』の説

である。『西宮記』や『江家次第』を見ると、もとは、参議が一人一人勅使の名を呼んで南階の下に召し、微音で「まちきんだちにみきたまへ」と命ずることになっていたのがわかる。しかし、その場に実在しない者の名を呼ばわったり、南階の下に控えるという架空の人物を相手に「まちきんだちにみきたまへ」と唱えるなどということには、さすがに無理があつたらしく、後には、ただ勅使を召す仕種を以て、これら全てを表すこととしたのである。内弁の台詞までを省略することは、次第の存立そのものに関わるためできないとしても、参議の作法としては、ありもしない幄に向かつて勅使を召す仕種をするだけで十分だったのであろう。

「御酒勅使」は、古代末期、変化する時の要請に応じ、新儀として立てられた。だが、一旦形を整えると、中世の儀式書の中に、時代の変化とは全く無関係に、次第として定着していった。実質的には全く無意味なものとなつても、なお、「御酒勅使」の儀が次第として生き延びたのは、由緒ある詞とそれに伴う作法を廃しては、中世の節会が成り立たなかつたからではないだろうか。

時を超えて伝えられる作法。それを継承し、実施するためにこそ存在する儀式。『建武年中行事』の節会次第は、どこまでも作法を中心に綴られている。その一貫した記述の在り方は、中世国家儀式の、ある本質的な部分と繋がっているものに違いない。『建武年中行事』の次第を通して、中世の節会と令制儀式との距離を測り、そこに作法の問題がさまざまな仕方に関わっていることを見てきたが、待ち構えるのは決まって、家職と一体のものとして儀式作法に拘り続けた家々と、節会を主催する国家との関係を、どのように見定めるべきかという難問であつた。最も基本的で、且つ最も重要なこのテーマに、わずかでも迫ろうと努めてはみたが、未だ全体的な

理解からは程遠いところにいる。今一つ、作業を進めながら念頭を去ることのなかったのが、後醍醐天皇の意識のありようについての疑問である。例えば、国家儀式の次第に、家々の家職や家格に対する執着が、かくもあらわに露呈することを、彼自身は如何に受けとめていたのか。『建武年中行事』の著者と「新政」を断行した天皇とが、同一の人物であるという事実には、時に思考の混乱に陥らずにはおられぬような、計り難い要素が含まれていると思われる。これについては、次に項目を改め、問題を絞った上で考えてみることにしたい。

注

- (1) 佐藤「建武年中行事」雑考(一)「陣の座の内弁作法をめぐって」の項(椋山女学園大学研究論集)一九九五年
- (2) 『後愚昧記』応安三年三月十六日条
- (3) 平山敏治郎氏「日本中世家族の研究」第六章「家礼・門流」
- (4) 『日本書紀』天武天皇八年正月戊子条一詔曰、凡当二月之節、諸王諸臣及百寮者、除兄弟以上親及己氏長、以外莫^レ拜焉。……、『続日本紀』文武天皇元年閏十二月庚申条「禁正月往来行^二拝賀之礼^一。……但聴^レ拜祖父兄及氏上者。」
- (5) 岡田莊司氏『平安時代の国家と祭祀』第五章「私礼」秩序の形成——元日拝礼考——
- (6) 正確にいえば、「まちきんだち」という訓み自体は、『内裏式』には明記されていない。即ち、後の儀式書において、内弁が「まちきんだちめせ」と唱えるところは、『内裏式』の「大臣宣、喚^二侍従^一」(踏歌・九月九日等亦同、余節宣、喚^二大夫等^一)とあるところに該当するが、そこには、「侍従」や「大夫」をどう訓むかの指定はない。だが、『西宮記』には、「内弁云、大夫達召^{マフヂンダテ}セ(大節ハ刀禰。凡以^二侍従^一称^二大夫^一)」とある。この注記は、明らかに『内裏式』の規定等を意識したもので、節会参加者を指すのに、元日節会等の小儀では「まちきんだち」と称して「侍従」の表記を宛て、その他の中・大儀では「とね」と称して「大夫」の表記を宛てるが、「侍従」も「大

夫」も実際には同じものだ、というのである。『内裏式』の「侍従」が、儀式実践の場で、音読されていたとは考え難い。おそらく『内裏式』編纂の当時から、「喚^二侍従^一」は「まちきんだちめせ」と訓まれたのであろう。

なお、『北山抄』には、「大臣宣喚^二侍従^一」(末不千君達召世。小節皆用^二此詞^一)とある。また、『江家次第』では、「装束司供^二奉上^一下装束」の頭書に「大節主典以上、小節以(次カ)侍従以上」とあるが、少なくとも『内裏式』の注記は、大節と小節とで参加者の範囲を異にせよと指示したものではないと思う。

(7) 古瀬奈津子氏「格式・儀式書の編纂」『岩波講座日本通史』第四巻「江家次第」は、王卿列立の標について述べる頭書で、「王臣儀、上古礼也、近代親王之外、王氏不^二参列^一也」と、特に、諸王の参会しなくなったことについても言及している。「上古」には、四・五位の王臣も、親王・公卿とともに参列したが、近頃では諸王の参会はなく、従って、列立に加わることもないというのであろう。

(9) 儀式書では、通例、「侍従」または「大夫」と表記して、これを「まちきんだち」と訓ませるが、諸大夫層を限定的に指す「まちきんだち」の新しい用法は、専らその表記のために生じたという可能性もないではない。

『内裏式』以来の「侍従」「大夫」は、五位以上の「まへつきみたち」を表すもので、これは、『養老令』公式令に、一位以下五位以上を「大夫」とすることにも通ずる表記の仕方である。しかし、「大夫」は後世、一般に五位の通称となっていた。「御酒勅使」が新儀として立てられた当時、「大夫」が既に五位を意味し、「まちきんだち」の語義も、表記の影響を免れなかったとすれば、その軸となるべき詞が「まちきんだち」にみきたまへ」とされることには、何の不都合もなかったろう。

尤も、このように考えたとしても、「御酒勅使」の次第が立てられた事情や、『西宮記』以下の儀式書が「まちきんだち」の新旧の用法を併存させている事実については、また別の説明を要する。何よりも、儀式次第における「まちきんだち」の新しい用法の出現と、一般的な「五位の大夫」の浸透と、いずれがいずれに先じたものかは、あくまでも不明である。ならば、これを節会における諸大夫層の待遇の変化と関連付けて考えてみることも、無益な試みとばかりはい

えないと思う。

(10) 『妙音院相国白馬節会次第』には、「揖了先召東方大夫二人。次召西方大夫二人。〔近例不召。先願巽方。正面之後。又更願坤方計仰之。〕大夫等一々称唯。進立南階左右。〔近例無此事。〕参議仰曰。大夫達御酒給へ。〔近例不仰也〕」とある。

○「後醍醐」とは何か

後醍醐天皇は、何故、『建武年中行事』を編んだのだろう。儀式書の編纂に、どのような意義を見出していたのだろう。儀式書の記述から、後醍醐がこの書に託したものの、その思想なり、政治行動と結びつくような一定の志向なりを読み取ろうとすることは、無謀な試みだろうか。

をりにふれ時につけたる大やけどども、行末のかゝみまではなくとも、おのずからまたその世にはかくこそ有けれなどやうの物語のたよりには成なんかし。

確かに、序文の一条は、この書を以て公事の規範としたいという意向をはっきりと述べてはいるけれど、それ以上の何事を語っているわけでもない。対象とすべきは、本文のみ。しかもそれは、随筆でも日記でもない、ただ儀式の次第を記しただけのものののだ。しかし、唯一の自著を前にして、ただ立ちすくんでいても始まるまい。当面の課題は、節会次第である。今は、これを読み解くことの中から、わずかな手がかりを探ってゆくほかはない。

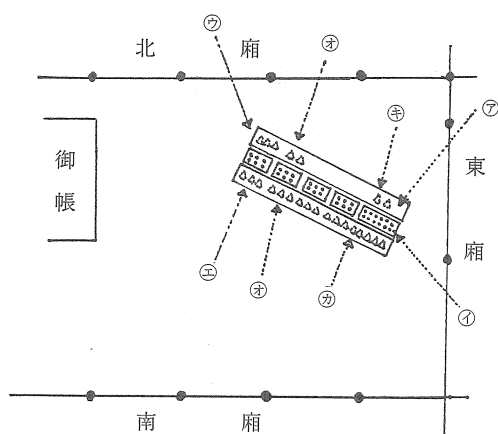
『建武年中行事』の節会次第の特徴は、既に繰り返し述べている通り、その記述が徹底して作法中心になっていることである。勿論、作法に関する記事は、『西宮記』以来、前代の代表的な私撰儀式書には必ず見えるもののなのであるが、それらと較べても、作法を記すこと自体が目的化しているという点で、全く異質なものとなつてい

る。特に節会に關していうと、その次第は、専ら天皇と内弁と参議の作法から成り、これを離れて中・下級官人の独自の動きに言及したり、場のしつらい等といった一般的な情報に触れたりすることは、殆どない。そのため、次第一つをとってみても、当の儀式の全体的な構図が見えてくるということは、まずないのである。

『建武年中行事』は、儀式全体の姿を見渡すような、俯瞰的な視点から書かれたものではない。このことは、『江家次第』の節会記事と比較した場合に、最も顕著で見やすいものとなる。それ以上に、この二つの儀式書の目指すところは、根本的に異なるのだということが、わかるのである。ここでは、酒饌の宴に關する両書の記述から、その典型的な例を挙げる。但し、『江家次第』の記事はあまりにも微細にわたるため、さしあたり必要な部分について、要点を説明するに止める。

まず、宴を賜わる殿上の王卿の座について、両書がどのように扱っているかを見てみよう。

『江家次第』『南殿装束』の条によれば、王卿の座は、御帳の東、南殿中の間の第二間に、五脚の台盤を挟み南北二列に対座する形で設けられる。南北二列といっても、各列は東西に延びるのでなく北西から東南方向に斜行するので、西の御帳から見れば幾らか振れる形となる。五脚の台盤は、北西から順に第一が大臣・親王の料、第二・三・四が納言の料、第五は大きな台盤を用いて参議の料とされ、それぞれに菓子盛った盤が弁備してある。第一の台盤は、北に親王、南に大臣。第二・三・四の台盤に着く納言は、南殿装束条では南とあるが、「参上着座」の注記には「近例中納言以下相分着北、依二公卿員数多一歟」等と見えて、人数が多ければ南北に分かれるとする。第五の台盤に着く参議は、北が四位、南が三位及び散三位。



- ⑦紺布毯代
- ①朱台盤・饌
- 第一台盤
- ⑦親王・元子・紫面敷物
- ②大臣(同右)
- 第二・三・四台盤
- ④納言(元子・黄色敷物)
- 八尺台盤
- ②三位参議・散三位参議
- (独床子・黄端茵)
- ④四位参議(簀子敷床子・黄端茵)

これらの座は、まず南北の列毎に毯代を敷き、その上に、親王・大臣は元子に紫面の敷物、納言は元子に黄面の敷物、三位・散三位の参議は独床子に黄端の茵、四位の参議は簀子敷床子に黄端の茵、というように、身分毎に格差を設けて据えられる、という。(付図1)

【付図1】『江家次第』 元日節会、殿上の王卿の座概念図

『江家次第』に記された殿上の座の配置からは、律令官制の論理がはっきりと読み取れる。官位の上の者ほど御帳に近い「西上」の原則、さらに、官位に従って厳密に区別された調度の種類や色彩。それらは、位階序列に基づく天皇と個々の官人との距離を、空間的・視覚的に表現するものであった。「装束」の項目は、単に奉行の者の便宜のために設けられたに過ぎぬのかもしれない。だが、こうした項目の存在は、節会という儀式を全体として見渡そうとする俯瞰的な視座と、無関係にはあり得ない。そのような視座に立ってなされた叙述からは、一つの論理を以て構成された国家儀式の姿が、自ずと浮かび上がってくるのである。

これに対し、『建武年中行事』は、外弁の王卿の昇殿作法を述べる中で、次のように、殿上の座に言及している。

大臣・大納言、はしにつく。親王・中納言、奥につくべし。但しまた、大中納言人数多き時は、びんぎにしたがふべし。

『建武年中行事』の関心は、位階の論理には向けられていない。というのも、殿上の座の配置において位階序列を表わすのは「西上」の原則であって、南北いずれの座に着くかということは、位階の上下には無関係だからである。南北の列については、『江次第鈔』の説明が参考となる。「大臣行事有便於昇降故、必着南座。親王不可着内弁上故、着北座。非参議二三位無職掌故、又着北。大弁必着南者、承内弁仰催雑事故也。大納言着南者、為続内弁也。」南に着くか北に着くかを決するのは、宴の進行に関わる職掌の有無によるというのである。つまり、ここでも、『建武年中行事』は、職務に伴う作法を綴るという姿勢を崩しておらず、作法に関する以外のことには一切無頓着である。本来の節会が令制に基づく儀式であろうとなかろうと、天皇と王卿との間に律令国家の論理が介在しようとし

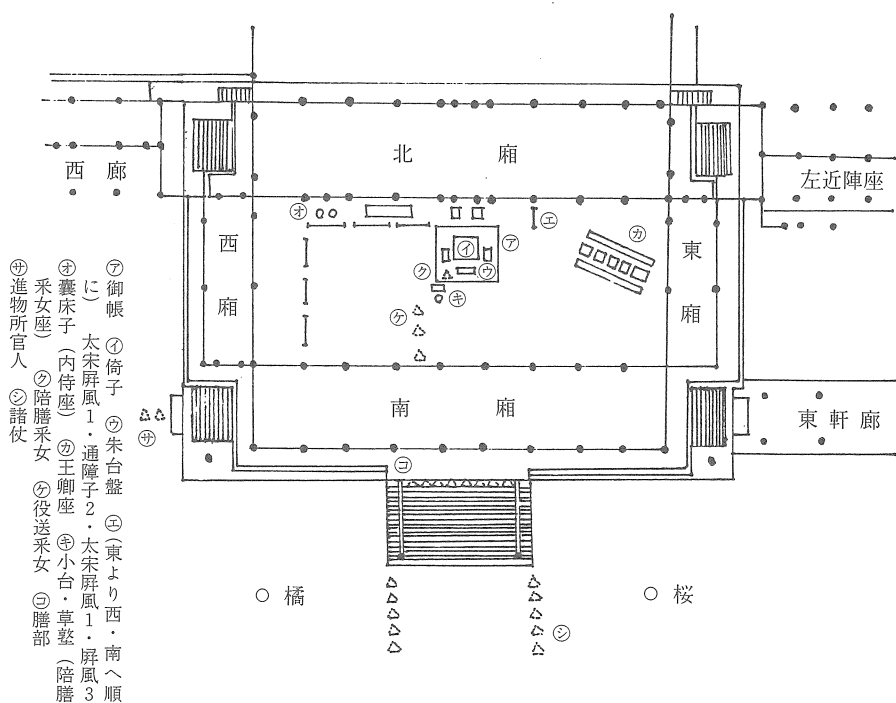
ていまいと、そのような類の事柄は、おそらく『建武年中行事』に
 とっては、全く関心の外にあるのである。

次に、饌の儀の最初に行なわれる「はれの御膳」についての記述
 を、対照させてみる。これは、天皇に四種以下の八盤を供する儀式
 で、八盤を総称して「はれの御膳」あるいは「威儀の御膳」ともい
 うのである。

『江家次第』は、その際の内膳司や采女の動きを、以下のように
 記している。内膳の官人等は、月華門から参入して南階のもとに進
 む。前行する内膳正や令史等は叉手し、後に膳部が従う。版位に着
 いて、令史は警蹕。供膳の儀の開始を告げ、諸臣・諸仗に起立を促
 すのである。この後、八人の膳部が南階の第一段に並び立つて供物
 を捧げ、役送の采女は順次これを伝え、陪膳の采女が天皇に供する。
 陪膳の采女が御帳に居て膳を供する間、役送の采女等は磬折して立
 つ、と。陪膳の采女は、供膳の間は御帳の上に居るのだが、別に、
 御帳の南面のやや西寄りに接して、台盤を載せた小台を置き、その
 南に、供膳前後の定席として草墊がしつらえられている。推測する
 に、八盤の一つ一つは、役送の采女によって一旦この小台の上の台
 盤に据えられた後、さらに陪膳の手で御帳の内の台盤に供されるこ
 とになっていたであろう。役送の采女については、御帳の正面を
 避けて西の間から出入りすべきか、ともいつている。供し了れば、
 西階に控える進物所官人が盤を受け、これを撤去する。(付図2)

『江家次第』に描き出される「はれの御膳」は、極めて莊重なも
 のである。内膳司や采女等の動作は、その一つ一つが、儀式という
 演劇空間の、周到に配置された舞台装置を思わせるものとなってい
 る。御帳の中の天皇を中心として、一切がそこに収斂してゆくかの
 ようなその動きは、食す国知らしめす天皇」という観念を表すべく、

【付図2】『江家次第』元日節会、南殿母屋装束及び「供八盤」儀の概念図
 (但し、紫宸殿図は「大内裏図考證」に拠る)



計算し尽くされたものだ。官人たちは、舞台装置の一齣として神話的天皇像の創出に参加しながら、同時に、五感の全てを以てこれを感じ受ける。そうした仕組みになっているのが見て取れる。古代国家の儀式はこのようなものだっただろうと、思わず納得させられるような記述ではないか。ちなみに、『西宮記』『供膳』の次第にも、『江家次第』とほぼ同じ内容の注が施されている。

では、『建武年中行事』は、「はれの御膳」についてどのように述べているのだろうか。

内弁、御膳を催す。下殿してこれを仰す。内膳のかみ以下、南階のもとにすむ。けいひちの声を聞きて群臣たつ。これよりさき、采女す、みて草とんにつく。役送の采女、御厨子所の中のばん二つもちてすむ。陪膳の采女（髪をあげたり。役送はあげず）、御台盤のおほひを（「阿めんなり」とりて、二つながら各御盤にすゑて、これをまかる。くだ物もとより御台盤にあり。ばとうばん、箸かい、同じくあり。臣下の台盤にも、くだ物はしかいかねてすゑたり。

内弁の供膳を促す仕種を以て、儀式は始まる。これを承けて、内膳別当を務める公卿は、下殿し命を伝える。令史の警蹕を合図に、群臣一同は起立。但し、『北山抄』『江家次第』によれば、内弁が供膳を促すのは、これが遅れている場合のみである。とすれば、実際には、「はれの御膳」を執行するにあたって、内弁以下王卿の仕事は、群臣起立ということの他、これといって何もないということになる。『建武年中行事』は、供膳に奉仕する官人の動きには、無関心である。ただ、供膳の開始に備える采女の所作だけは、丁寧に書き込まれている。陪膳の采女は、南殿西の御膳宿から進み出て、御帳の南脇の草整に着く。次に、御帳の内の台盤に懸けられた両面錦の覆

いを取り、これを、役送の采女の捧げ持つ御厨子所の中盤に据えて撤去させる、というのである。しかし、『建武年中行事』が、うるわしく髪上げをした采女をここに登場させたのは、勿論、この大がかりな儀式における官女の役割を示そうとしてのことではない。台盤の覆いを取り去るという采女の動作は、これより以後、台盤の前に展開されるはずの天皇作法をいうために、その前提として置かれているに過ぎないのである。采女が覆いを取る。天皇の視線は、宴の作法の重要な小道具である台盤に向けられる。すると、「くだ物もとより御台盤にあり。ばとうばん、箸かい、同じくあり。」というわけである。

この後、記述は直ちに「わきの御膳」に移り、供膳の遅滞した場合に内弁がこれを促すための定型の詞を記す。続いて、八盤とともに一括、「御膳のくさぐさ」を列挙する。「わきの御膳」は、『江家次第』によれば、供膳も南階からではなく西階から行なわれ、群臣の起立もなく、いわば「はれの御膳」に付属する性格の儀式であるが、『建武年中行事』は、両者を一括りにした上で、その扱いにも殆ど差を設けていない。それは、『建武年中行事』の関心が、ひたすら家職に伴う作法のみに向けられており、そうした観点からすれば、記し留めるべき作法に乏しい「はれの御膳」は、節次次第の中に格別の位置を占めようもないからである。饌の儀の次第のうち、天皇や内弁の作法、特に天皇作法が問題となるのは、臣下に餽餼を賜う儀以下であって、先に、台盤を小道具とする天皇作法としたものも、「供膳」の儀で行なわれるものではなく、臣下に饌を下賜する場合で大きく採り上げられるものについていうのである。『建武年中行事』にとって、宴の次第の主要部分は、天皇が臣下に向けてその作法を披露すべき、「臣下餽餼」の儀以下にある。「供膳」の儀

は、「はれの御膳」も「わきの御膳」も一纏めに、主要な部分の前段階に位置する次第というだけのもの。それ以上の意味は何ももない。こうした記述が、古代国家の觀念や、神話的な天皇像といったものとは全く無縁のところではなされていることは、改めて付言するまでもなからうと思う。

見てきた通り、『江家次第』の記述は、明らかに、令制儀式としての節会に照準を定め、文字の上にその仕組みを再現しようとしている。これに対して、『建武年中行事』の記述は、令制儀式などというものを相手にしてはいない。というより、節会という儀式を通して表れるはずの国家像に対し、何ら具体的な規範を以て臨んではないとするのが、正確であろう。『建武年中行事』の節会記事は、作法の体系の記述として、全く完結している。作法を中心に再構成された次第や個々の儀礼の様相から、国家儀式というものに對する明確な規範の存在を読み取ろうとしても、何も出てはこない。おそらく、そのような読み方は、対象に即したものでないのである。

では、後醍醐天皇は、何を目的としてこのような儀式書を編んだのだろうか。『建武年中行事』の記述から浮かび上がる節会の姿は、ただ、天皇と公卿とが各々の家職とともに守ってきた作法を披露し、互いにその正統性を確認する場というばかりのものである。天皇は、もはや百官を統べる律令国家の長ではなく、内裏の殿上という閉ざされた空間の中で、公卿たちの伝統的な役割分担に保証を与えるだけの存在である。いや、その閉鎖空間にあつては、確実に、天皇自身も役割の体系に組み込まれている。それは、かくあるべしという規範意識から生まれたものではなく、既に存在するものを追認する姿勢によって描き出された、中世節会の似姿というべきだろう。後醍醐は、国家儀式の意義をそのように捉えた上で、自ら、儀式の主

催者たる天皇の家の正統であろうとしたに過ぎないのだろうか。

しかし、『建武年中行事』の著者は、既成のものが既成のままにあり続けることを、まるごと容認しているわけではなかった。その節会次第には、「本儀にまかせて」あるいは「ふるきにかへりて」当代に復活したという事柄が、逐一特記されている。その改定事項とは、饌の儀や酒盞の儀では実際にも飲食をすることにしたとか、奏楽では左右の立奏の曲目を増やしたというのである。ここでは、事情の比較的理解しやすい、饌の儀の例を挙げる。

饌の儀は、八盤以下の供膳——餽餽を賜う——羹以下の供饌——飯・汁を賜う、というように、およそ天皇への供膳と臣下に対する饌の下賜とをセットにした形で進行する。(別表) このうち、公卿との連携による天皇作法が問題となるのは「臣下餽餽」「臣下飯・汁」の次第で、内弁は、大弁兼務の参議を通じて饌の下賜を催し、準備が整ったところで、同じく参議を通じて、まず天皇から箸を下すようにという、臣下の側の要請を天皇に伝える。

「餽餽」の際には、天皇は、実際には餽餽に手を付けず、馬頭盤なり箸台なりに置かれた銀の箸を扇で打って合図をする。これに応じて、臣下は箸を下す。

御箸くだる〔うるはしくはめさず、扇して御箸の台のかねをならすなり〕。臣下みなこれに応ず〔箸をとる也〕。

だが、「飯・汁」の際には、天皇は合図として箸を鳴らしてから、実際に食事をし、臣下もこれに続く。それは、近頃では行なわれなくなった「本儀」を、当代に復活したのであるという。

御箸くだる、さきの如し。但本儀にまかせて、かねのかひはしをたつ〔今の代の事なり〕。臣下おなじく箸をたつ。

*「さきの如し」＝『群書類従』本「さまのごとし」

「かねのかひはしをたつ」というのは、天皇が、銀の箸・匙を食器に立て、それを使って物を食べる、といっているのである。正式な食事の作法として、食事中は箸や匙を食器に立てる、ということがあった。器の内の手前と向こうに、あるいは左右に立てて、食事の中の定位置とするのである。さらに、今日の「箸を付ける」「箸を使う」などの言い回しと同様、箸を立てるということを以て、実際に物を食べることもまでをも婉曲に表すことがある。ここは、その用法である。

『建武年中行事』は、専ら天皇作法について述べているのだが、節会において実際に物を食べるか否かということが、故実の世界で問題になっていたとすれば、それは、臣下も含めてのことであろう。また、このことが問われるようになったのは、ほぼ十二・三世紀を境として、それ以降のことと思われる。

古い時代の儀式書を見ると、細かな作法など記さぬ『内裏式』は勿論のこと、『西宮記』には「聞^き天皇御箸音^{おん}、臣下嘗^かレ之^を」等とあり、『北山抄』には「天皇^{みかど}御箸^{みかど}」。群臣^{ぐんしん}搢^{しん}レ笏^{しやく}下^{した}レ箸^{しやく}」「重下^{おもひした}御箸^{みかど}」。群臣^{ぐんしん}食^く畢^{はつ}」とあって、ただ、天皇に続いて臣下が食事をするというだけである。『江家次第』も同様の書き方であるから、十二世紀初めの頃までは、少なくとも、実際に食べるか否かは、特に問題となっていないのである。十二世後半の藤原師長「妙音院相国白馬節会次第」では、天皇については、「主上以御扇令撥鳴在馬頭盤上之銀御箸給。〔謂之御箸下。実不立御。〕」とあって、合図として箸を鳴らすだけで本当に餛飩を食べるのではないとする一方、臣下については、「王卿聞御箸声。…取箸立餛飩食之。〔食了猶立箸。〕」「御箸鳴後。王卿先取箸。立飯内方。次取乙立飯外方畢。即取汁器漬飯食之。〔食了立箸於飯。〕」とあり、箸・匙を立てて餛飩や飯・

汁を食べるとして、特にそれが仕種だけのことであるとも述べていない。ところが、十五世紀の一条兼良『三節会次第』になると、「先立^{さきだて}レ箸^{しやく}。〔不^ふレ建^{たて}レ匕^{へし}。〕更如^{さら}レ形食^{かたちく}了^{りやう}。如^{ごと}レ本立^{もとだて}レ箸^{しやく}。近代一向不^ふレ及^{およ}レ食^くレ之^を。〕というように、臣下は餛飩の器に箸を立て、さらにこれを用いて食べる動作をするだけで、実際には食べないのが近頃の方式、と明記する。

確かに、儀式書の記載を字義通りに解する限り、かつての節会では実際に食べていたのだが、後には仕種だけを以てこれに代えるように変化した、と読めるのである。但し、十二世紀以前の実態に関してはあくまでも不明であって、節会本来の意義からすれば実際の飲食を必須と考えたいところだが、儀式であれば形だけでも一向に構わないだろう。『古今著聞集』には、「建久の比」の話として、摂政九条兼実が、「近代、節会なども上達部、物を食はぬ事いはれなき事なり。ふるきにまかす」べしとして、節会で物を食べる方式を復活しようと試みたという説話がある。『古今著聞集』の成った十三世紀半ばの時点での見方として、節会で実際に物を食べることが、いつの頃から行なわれなくなっており、そうした情況は、「建久の比」即ち十二世紀末には既に固定していた、との認識があったわけである。つまり、ここでいえるのは、かつては問題とされなかった事柄が、十三世紀頃から、ことさらに注目されるようになったということ。この頃、節会での飲食は仕種のみとするのが通例であったが、おそらく前代の儀式書等の記述を字義通りに解した有職たちの活動によって、実際に飲食をするのが故実に叶った方式であるとの見解が行なわれ、これが説話となる程度に一般にも知られていたということ。そこまでである。

『建武年中行事』に「本儀」というのも、天皇・臣下ともに実際

に食事をするやり方を指すことは、まず間違いなからう。その「本儀」の概念が、故実の世界でいわれるところの、具体的にどの時代ということもない過去の流儀であることも、確実である。奏楽の次第、左右立楽の曲目を列挙した後に、後醍醐は、有職の天皇の自負の滲む語調で、こう述べている。

臨時の勅によりて、この比各三曲もあり。大かた、ちかごろは此事なし。当代ふるきにかへりておこされたるなり。

後醍醐が、「本儀にまかせて」節会の姿を改めたという時、それは、節会本来の意義に鑑みて現在のあり方を正した、などといっているのではない。伝統と正統を重んじる故実の世界の枠の中で、漠然たる「いにしへ」の姿を取り戻そうとした、というだけなのだ。

作法の体系として綴られた節会次第は、それが如何に故実の知識を駆使したものであろうと、過去のどの時代の儀式を再現するものでもなく、現在の節会の姿を映し出すものでしかない。なぜなら、故実の世界に伝統といふ古風というの、所詮は、作法の体系を支える家々のために存在するのであり、家々がそれを必要とするのは、現在ある作法を否定するのではなく、持ち伝えるものの正統性を保証するためなのだ。自らの視座を現在の価値に置いたままで、既成のものを改変する。漠然たる「いにしへ」のみを根拠に、目前のものを正そうとする。そうしたやり方は、あるいは、故実の世界、儀式の世界だけのことであれば、通ずるものだったのかもしれない。しかし、国政を動かす方法としては、通用すまい。後醍醐は、そのことに気付いていただろうか。

『内裏式』から『江家次第』に至るまで、前代の儀式書は、酒饌の宴の後に「宣命」「賜祿」の次第を立てて、国家儀式としての節会の構造を完結させている。「宣命」は、天皇直々の詞を賜い、節

会の主催者たる天皇の存在を改めて臣下に確認させるといふ、重要な意味をもつ次第であった。「賜祿」も、臣下の元日拝礼に対する応えとして、それ自体が、宴を賜うことと同様の意味をもつ天皇の行為であったはずである。しかし、作法の体系の中では、儀式を構成する全ての要素が、意味的な解釈を一切捨象した単なる「形」と化す。『建武年中行事』に、「賜祿」の次第は立てられていない。詳述されるのは、「宣命」「賜祿」に先立って、宣命の文と祿を賜うべき参会者の名を記した見参の文とを、天皇の奏覧に供する、その際の細かな手順きである。内弁作法・天皇作法として緻細に練り上げられた所作の連鎖のうちに、賜祿という行為もその意味も解消され、ついに次第として記されることさえない⁽²⁾。また、『建武年中行事』における「宣命」の儀は、宣命使の役を務める参議のためのものである。その次第は、およそ以下の通り。内弁以下殿、左近陣の南に異位重行。宣命使は、軒廊から諸卿の後ろを経て、日華門の北扉に当たって「曲折の揖」をし、西に折れて、未だ日中であれば練歩。宣命の版位の南に立って、揖し笏を挿す。宣命の文を開け、差し上げて前半を読み、群臣に向けて拝聴を促す如く文を差し出してみせる。群臣再拝。後半を読む。群臣拝舞。この間に宣命使は文を巻き、退いて揖し、わずかに前進して右に巡り、往時と同様のコースで堂上に帰る。群臣も戻る。——このような「形」を以て表される「宣命」の儀が、参議の家の、相伝の作法を披露する場という以上の、どのような意味をもつというのだろうか。天皇の詞を奉ずる宣命使の作法が、参議の家の者にとつての晴れ舞台となる事情は、「内弁謝座」の場合と、全く同じである。

確かにここには、古代国家の残影をいささかも引きずることのない中世国家儀式の姿がある。それは、古き「形」に執することで、

逆に古代国家の神話を破壊し、古代からの断絶を遂げた、といったものであろう。後醍醐は、『建武年中行事』を書くことで、そうした中世節会のあり方を再確認したのである。そして、後醍醐自身の拠って立つ所もまた、家々の、故実の世界の内にあることは、ほぼ確実であろうと思う。

繰り返し問うてみる。後醍醐は、何を目的に『建武年中行事』という儀式書を編んだのか。儀式作法に通曉することによって、単に、天皇家の正統であろうとしたのだということも、当時の時代状況からすれば、あり得ぬことではない。但し、『建武年中行事』において、天皇作法と公卿層の作法とは、全く同等の比重で扱われており、これを天皇作法の書と見ることには無理がある。これが、家職に伴う儀式作法の、全般的な掌握を意図したものであることは、動かないだろう。つまり、後醍醐の狙いは、ただ、天皇を“職”とする家の正統たらんとしたのではなく、“職”を統括し、国家儀式を主催する天皇としての正統性を主張することにあつたと考えられる⁽³⁾。

しかし、有職の天皇であることは、“儀礼国家”の長をアピールするには有効であっても、現実の国家機構を改変しようという場合に、それが何程の力になるというのだろうか。“いにしへ”を今に再現するという故実の方法は、あくまでも、現在あるものの由緒正しきことを保証するためのものである。そうした方法的限界に無自覚のままで、故実の方法を国政に適用し、現一秩序の崩壊にも繋りかねぬ機構改革を断行すれば、いずれ、現一秩序の側から強烈なしつべ返しを喰らうだろうことは、目に見えている。それは、自らの足場を崩すにも等しい荒技と思えてならぬのである。

後醍醐は、その称号を遺勅により定め、また生前に自称してもいいという。では、“後の醍醐”とは何か。彼は、“延喜聖帝”の、如

何なる事跡を襲おうとしたのか。“延喜・天曆の治”の実態や、その美称が本来どのような意味で唱えられたものかという問題は別として、後醍醐の施政との関係でこれを捉える場合には、醍醐・村上ともに摂関をおこなったことによる天皇親政と、『延喜式』の制定等に見られる令制儀式の整備という二点を当該期の特徴として挙げるのが、今日の一般的な理解の仕方であろう。こうした理解は、時に、新政における律令体制再強化の意図をいうところまで敷衍される。しかし、後醍醐が“延喜聖帝”の治世を如何に解していたかとなると、果たしてそれがどこまで具体的なものであったかは、疑問である。後醍醐の目指したものは、少なくとも律令国家の復活ではなかった。彼は、院・摂関・幕府の政治関与を排し、親政を志向した。だが、その範として、令制に基づき百官を統べる古代的な天皇の像があつたかどうか。また、内裏を再興し国家儀式を整備しようとも志した。だが、その設計図に、“食す国知るしめす”神話的天皇の占めるべき場所を用意されていたかどうか。後醍醐の脳裏にあったのは、おそらく、“聖帝”の親政のもと、諸芸の花開く“聖代”があつたという、その昔の幻想である。後醍醐は、“聖帝”の再来として、“聖代”を今に再現しようと望んだのではなからうか。もしそうだとすれば、この天皇は、過去のどの時代にも実在せず、現在を破壊した先にも存在しようのない、“いにしへ”の国家を理想とし、生涯、その幻想の中に、絶対的君主として君臨し続けたのである。

注

(1) 『古今著聞集』巻第三、公事、第百話

(2) 『江家次第』は「賜祿」の次第を立てている。だが、頭書には「近代祿非沙汰限」、少切布也、或以紙為代」とあり、この次第は、

早くから形骸化していたことがわかる。

- (3) 松園齊氏によれば、十一世紀後半以降、諸家のみならず天皇家においても、日記や儀式作法書の父子相伝を重視する「日記の家」形成の動きが進行したが、中でも、白河以下四代の院による諸家の日記収集は、「単なる「日記の家」の家長というレベルを超越」し、「国王」として、当時の貴族社会に形成しつつあった多数の「日記の家」の支配に向うものであつたろうという。「中世天皇の「家」について——「日記の家」の視点から——」（愛知学院大学『文学部紀要』一九九一年）このような院の活動と後醍醐の儀式書編纂の意図とが、どのように重なるものかは、さらに考える必要がある。

- (4) 林陸朗氏「所謂「延喜天曆聖代説」の成立」、戸田秀典氏「延喜・天曆の政治」（『延喜天曆時代の研究』所収）

- (5) 後醍醐の独裁的人事は、律令制官僚組織の最高に位置する太政官の議政官会議の存立さえ否定するものであった。佐藤進一氏『日本の中世国家』第三章第二節「建武新政」

- (6) 『太平記』卷十二「大内裏造営事付 聖廟御事」。なお『建武年中行事』「二宮大饗」には、「近頃はたえにたれば、其儀をしるさず。大内など出でて、中宮・春宮同御所ならば、さだめて行なはれなん。」とある。

*本文出典一覧

- 『建武年中行事』『作法故実』『三節会次第』——以上、『群書類従』
 『内裏式』『西宮記』『北山抄』『江家次第』——以上、『神道大系』
 『江次第鈔』——『続々群書類従』
 『妙音院相国白馬節会次第』——『続群書類従』
 『養老令』——『日本思想大系』
 『日本書紀』——『日本古典文学大系』
 『続日本紀』——『新訂増補国史大系』
 『花鳥余情』——『源氏物語古註釈大成』
 『古今著聞集』——『新潮日本古典集成』

原則として旧漢字は新字体に改め、注記は（ ）内に一行書きとした。また、引用にあたって、『建武年中行事』については、和田英松註解・所功校訂『新訂建武年中行事註解』により仮名遣い・文字遣い等を改め、『江次第鈔』『花

鳥余情』については、私に句読点を加えた。